
恋占い～哀の気持ち～

リリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋占い～哀の気持ち～

【Zコード】

Z9144E

【作者名】

リリカ

【あらすじ】

哀視点で書いてみました「哀になる前の」哀な感じです

第一話 雷の鳴るといい

私が最近パソコンで気に入っているサイト

「恋占い」

吉田さんにすすめられて見始めたんだけど

結構おもしろい

そして恋占いの相手は今私の隣にいる工藤君・・・だつたりもする
今日はゲームをしに少年探偵団のみんなが遊びに来ている

「花火大会・・・?」

工藤君は円谷君の言つた言葉をオウム返しに聞く

「はい 今日の夕方午後6時から

米花川でやるんですよ 皆でいきましょっよ」

時計は3時半・・・随分と急な話だけど

ちょうど夜博士いないし・・・いいかしら

そこで5時半に米花橋と待ち合わせをして皆は帰っていた

4時 私はタンスから浴衣をだしていた

前には着ていけなかつたからちょうど良いだろ

5時さつきからソワソワしているのは自分でも分かつた

一応見ておこうかしら

パソコンに向き直り電源を入れる

サイトを「恋占い」にして結果は

雷が鳴るとこりの恋のキューピットあり

つまり雨が降ればいいのかしら

5時半米花橋には既にみんないた

思つたとおり吉田さんも浴衣

ピンクの花柄とてもカラフルで吉田さんにぴったりだつた

私は黒の花火柄

男子は全員洋服

吉田さん円谷君小嶋君とちょっとと闇を空けて歩く私と上藤君
こんな一時も楽しく思える

「へえ 灰原も浴衣着るのか」

「何 その言い方」

「ま、毎年おめえいつも……祭の時つて洋服じゃねーか」

「あなた……私の」とを男の子だと思つていてるの?」

「思つわけねえだろ……でもその浴衣 似合つてね」

「え……?」

嬉しかつた

わざわざ出しておいたかいがあつた

カラッコとしばらく私の下駄の音がする

自分の中では心臓の鼓動がとても良く聞こえた

「あれつ あこつりはどいだ?」

工藤君が声を上げる
つられて私も前を見る
確かに3人とも忽然と消えていた
ずっと真下をむいていたから気付かなかつた

「本当」

「しょうがねえなあ」

工藤君は頭をかくとキョロキョロと見回す

「はあ・・・あいつひどいってんだ?」

「あつち行つてみたら?」

「ん? ああ そうだな」

と私が指さす方へと進んでいくつち
とんでもないところへでてしまった

「おじおじ・・・じじだよ!」

地元の工藤君でも分からぬ道並み
もしかして私は方向音痴なのかな

「あ、あの工藤君、」め

謝ろうと声をかけた瞬間
夕立が雨が降つてきた

「灰原 走るぞ！」

工藤君は私の腕をつかみ走り出した
しばらくして
私たちはどこか知らない神社に辿りついた
そして雨はやみそうにない
でも 彼と腕だけでもつなぐ事ができた
それだけで私は十分だった

「やみそうにねえな 雨が弱くなるまで待つか

その時

雷が空で光り 鳴り始めた
私は夏なのに少し雨にかかつたせいか寒く 少し震えてしまつた

「怖いのか？」

雷を怖いと勘違いしているようだ
でも 一応怖がっているふりをしてみよう

「・・・・・少し・・・・・」

工藤君はその様子を見てどう思つたのだろう
心配してくれるかしら
そして私は思いがけない行動に少し戸惑つた
何故か私の右手が温かい 見ると工藤君が左手で私の左手を握つて
いる

「え・・・・・？」

「嫌か？」

「いいえ……別に」

「大丈夫 僕がついてる 約束したる?
俺はお前を守るって」

「あら・・・私は組織からしか守らなって思つていたわ」

憎まれ口をたたいてしまう自分を恨んだ
本当は嬉しいのに・・・
手を握つてもひりのも
約束を覚えていてくれたことも
でも彼は怒つてない様子だ

「お やんできたな 行くぞ」

「え、ええ」

一人きりにななくなると思つと名残惜しいけど
もう行かないと心配するわよね
ふとあの占いの事を思い出す

雷の鳴るといい恋のキューピットあり

確かに そうかもしけないわね

第一話 雷の鳴るヒル（後書き）

こんなのが書いてる暇があるなら
紫陽花の屋敷をもつと更新しきよと思いますよね

両立させて連載したいなと思いつています

第一話 甘えてみると

風邪をひいてしまった

原因はあの花火大会の時の雨 あの時濡れたままだったから
そして先ほど別にする事がなかつたからパソコンをしていた
だから体が重く感じる・・・自業自得よね
あのサイトも見てみた

そして結果は

甘えてみると恋の急転あり

つといつても甘える人がいないし別に甘えたくない
だけど・・・博士こんな時に限つて学会に行つて・・・
ベットで転がつてゐるうち氷枕がもう冷たくなくなつてきた
そろそろ変えようかしら でも体が重い
きつと立つてしまつたら倒れてしまうだらう
そんな時

「博士ーーー！ボール補充してくれよーーー！」
うしたんだ？」

「見れば分かるでしょ 風邪よ 風邪

「まさか 昨日の雨か？」

工藤君は来てすぐに凶星な事を言つてくれる
といつても理由がそれしかないからじょうがない

「やうよ・・・」

「どれどれ」

工藤君の顔が見る見るひびいて来る
彼は何を思ったのだろう
私のおでこに彼のおでこをくつつける
彼には躊躇いといつものが無いのだろうか

「あー 確かにおでこ熱いなー おいおい水枕冷たくねえじゃねえか
待つてろ 今変えてくるから」

水枕を持ちながら彼は台所へといつてしまつた
それにしてもさつきの工藤君の行動にはドキドキした
そのドキドキからまた熱をあげたのか
体がだんだん熱くなつてきた
工藤君が水枕を持って帰つてきた
頭がひんやりするほど気持ちよかつた

「どうだ 体調は?」

「変わらないわ」

素つ氣無い 話が途切れてしまつ
本当はもっと話したいのに・・・

「あ もう毎日 腹減つたの?」

「少し」

「んじゅ やひと待つてる」

すると彼はまた台所に消えていった

「そういえばやつと甘えられる人を見つけたかも知れない
でも皆彼がやってくれて言う必要も無い

それにこれ以上は無理な気がした

数十分して彼が帰ってくる 鍋を持って

「ほれ・・・」

彼はそばにあつた机の上に鍋を置きおわんに盛り付けた
中身はおかゆだった

「立てるか?」

「・・・」めんなさい もう帰つて良いわ 後は自分でする

もう彼に迷惑を掛けれない

「どうして謝るんだ?」

「もう・・・あなたに迷惑を掛けれない」

すると彼はベットに座り笑つた

「別に迷惑だなんて思つてねえよ

昨日の事は俺のせいでもある

それに今俺は勝手にやつてるだけだ」

「どうして彼は笑つていられるのだろう

彼のせいではない 私のせいなのに・・・

どうして私を許せるのだろう

「…………だから もうと甘えてくれても良いんだよ」

「え…………？」

「今 お前は苦しんでるんだ それをぼーっと見てられるかつて」

彼は手を私に差し出す
思わず私も手を差し出す

「肩かすから そこのいすに座れよ」

私は彼のいうとおりにした
お椀には出来上がりたばかりのおかゆ
一口食べてみた

「…………おいしい」

「…………良かつた」

本当においしかった 彼は一人で生活してた頃もあってか
とても料理が上手だった……少し熱いけど

甘えてみると恋の急転あり

次彼が風邪をひいたら私に甘えてもいい……そう思った

第一話 甘えてみると（後書き）

・・・・ そろそろ脳内が爆発しそうです

明後日から一学期なので

さらに

投稿しづらくなっています（もつあまり投稿してませんが）

次回が最終回です

キーワードは3つ！！

素直 動物園 告白 です

お楽しみにーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9144e/>

恋占い～哀の気持ち～

2010年10月10日07時24分発行